

虚の符

洪水企画 2023.9.15

32

イカタ

http://www.kozui.net



ⅰ 園芸用語「ステーション」は「大辞典」を拾う
光は、息を奪おうとするので息苦しかった。
新月を待って魔女の薬草 Wormwood の草叢の闇を駆け抜けてわたしわたしの(自己)は大いなる棄却の旅に出た。二日目の夜明けに硫化水素臭が沸く川を越えたと風がきて園庭の沼地に閉じ込められてしまった。白樺の幹に纏まって園芸ゴミステーションで拾った『こぼ大辞典』の「沼地の美醜」が顕れる角度を測っていた。既に棄却されたことばの元のところに有った『こぼ大辞典』の意識がゆつくりとこちらへ来る。四日目に光の感覚が、両手の指先を強ばらせて全身性強皮症のようになる。皮膚病に効果のある硫黄泉に戻って身体の皮膚感覚を整えて、光との境界へ侵入していく。早くも背中言語感覚に天使の羽が生えるときの痛みを伴う快楽が来ている。沼地の美醜の痕跡を探していると、光の波がウイリスのように助間神経を移かせ始めた。身体の苦しみはことばに死臭を匂わせながら、わたしを(自己)の果てへと誘う。

ⅱ 匂い出る表現を!

沼地が晴れわたった。
地衣類が活発に動き始めた。緑の芽にたまっている水滴がきらきら輝きながら、蒸発して行くウキウキサクレーションが風に流されてイクサとガマ穂の根元に塊を作った。岸辺に草が寄せられて瞬く間に沼の底が干上がった生物が干からびていった。両足の巻き爪の上に見える光の幼芽で足が血だらけになる。鼻腔の奥で匂いが育っている匂いがある。(匂いを吸う!) (匂いを吐く!)
光は、光の血管を光の粘膜の外に埋める。光たちが不快な血の匂いを発生させたことを鼻腔粘膜に謝罪をしている。光たちの謝罪を受け容れる。スマートフォン文字から強烈な硫化水素の匂いがある。匂い出る表現を!



ⅲ 目配せをしながら

園庭の沼地に閉じ込められてから初めて見た空に雲が漂う。干上がった沼地をよぎって白い雲に従う。わたしとわたしの(自己)は空腹を満たすために柑類の匂いのする互いの産毛を咬み合った。葉草の匂いが唇を這って歯茎をまたし気管支から内臓へ流れ大脳を活性化させた。草の言語感覚が骨に染み渡った。光は闇から押し出した『こぼ』を闇に引き戻した。すると、闇が、わたしとわたしの(自己)の上に降りてきた。

ⅳ 堆く棄却されたことばの本の灰の上に

園芸焼却場で燃やしていることばの本の煙が空を二酸化炭素で覆い尽くした。リンの匂いがした。人間が燃えるときと同じ匂いに、総てのものが声を失った。ことばの本の有毒性を匂いによって知ったのだ。わたしが咳き込むと、わたしの体内で燃え尽きた(自己)が焼死体となって口から出てきた。亡骸を拾って灰の中に埋めると、血だらけの足の傷が治っていた。堆く棄却されたことばの本の灰の上に、ぼつかりと十五夜の月が上がった。月の光は弊衣蓬髪を髪を愛おしく撫でて、燃え尽きた(自己)を埋めた灰の上に寝るように促した。そして、腐敗して膨らみ始めたわたしの内蔵の上に、千種類草の匂いを被せた。すぐに、猛禽や獣や土の中の虫たちがそれぞれの触手で、身体感覚と言語の肉体の混迷を解き明かしていった。この世の穢土を離れて、今はいつの世なのかも分からなかった。わたしの肉体は溶けたようだった。Wormwood のなつかしい草の匂いが閉じ込められた沼地の美醜を現している。棄却を逃げた肉体が種々の根に絡め取られて行った。

夜の詩人 (Joseph Brodsky)

伊武トーマ

闇に長い影を紛らせ詩人はさまざま
聞き分けのない歌に背を向け詩人はさまざま
夜雨……
それでもすがりつこうとする歌を満らし……
傘もなく闇に長い影を紛らせ詩人はさまざま
泣き濡れた歌を振り払い詩人はさまざま
雨はますますつらく……
泣き濡らした歌の横顔に弾き叩きつけ……
ウオッカ二本とジョン・ダンの詩集一冊、使い古しのタイプライターを入れたトランクを下げ詩人はさまざま
誰があなたを詩人と認めたくんぞ?
誰があなたを詩人のひとりに加えたくんぞ?
誰も……
じゃあ、誰がわたしを人間のひとりに加えたつて言うんぞ?
不条理な文学裁判の傍聴席で
押し黙るしかなかった歌に背を向け詩人はさまざま
だが、そもそも詩人には国家もなければ戸籍もない、詩人とは人間の姿をしていても人間に非ず、詩人というひとつの種族なのだから……
亡命……
雨はますます激しく……
月明かりに浮かぶ夜の旧レニングラード、いまでも愛する歌の面影を胸に抱き……

傘もなく闇に長い影を紛らせ詩人はさまざま

(2023.5.8 (MON))



手のひらという器に

神泉 薫

手のひらという
美しい器に
とうめいな水をそそいで
ひとくち
唇にふくめば
それは光となつて
からだをめぐる
ふりそそぐ
こまやかな粒子
愛おしい記憶のかけら

ふたり
手を繋いで歩いた夕日の道
見上げた夜空の星々はまたき
車窓のガラスに映るみどりのまぶしき
ひとひらの薄桃の花びらは舞い
ゆるやかに移りゆく四季を
幼子のちいさな指がたどつてゆく
二度と巡り会えぬ体温に満ちた
ひとつひとつの
やさしいことばを胸に含んだ
幾千もの生の糸が
この星を包んで
——もういいよ

呼んでいるのはだれ?
深い闇のとびらの向こう
慈しみ深く誘いの風をまとつて
すこやかな眠りの意志を
私たちへ告げる
宇宙
手を合わせ
瞳を閉じれば
垂直に立つ
一本の木
風の呼吸
もうひとつの命を
生き始める

にじむ 生野 毅

すでに
にじんで
消えてしまったはずのものが
壁紙の破れ目から
暑さで反った木の床の継ぎ目から
染みだす天井の隙間から
ふたたび
にじみ出てきている
階段の脇からうかがうと
誰もいないはずの二階にも
いっばい
にじみ出てきている
気がして

積み損ねたボール箱
ちぎりとれたレポト用紙
皺だらけのティッシュ
束ね切れていないチラシや雑誌
溜めこまれた処方箋や領収書
壁紙の切れ端
につくに
にじんで
消えてしまった
ちちや
はが
ところかまわず
赤サインペンや黒マジックで
書き散らした
メモや計算の跡が
固まった血糊のようにも見える
気がして

浴槽に張られたままの
ぬるんだ水の中では
すでに
にじんで
消えてしまったはずの
わたしの右手と左足が
共喰いの魚たものように
ぐるぐる旋回している
気がして

詰まりが解消されないままの
便器の底からは
何本もの腕が伸びて
蓋を裏側から押し上げている
気がして

バス 池田 康

いつの間にかバスに乗っている
乗り込むときにタッチしたスイカは残金あつたか
はつきりと覚えていない
どうせバスだ
そんなに遅くへは行かない
一番後ろの右端の席に収まると
とたんに眠気が襲ってくる
イヤホンに耳につくことで目をつぶる
ZZZ
外は夜
少し雨も降っているらしい
風も吹いていそうだ
斜め前に座る女が開いていた上方の窓を閉める
バスの内部は安心して安全
そう騙されて眠り込むわれわれ
天井の光がやけに白い
ZZZ

バスの図体はでかい
こんなものを運転するのは骨だらう
運転手の顔は知らない
かまうものか
ちゃんと走ってくればそれでいい
バスにはバスの時間があつて
騒々しく揺れながら
微妙に宙に浮いている
ZZZ

ここはどこだ
バスは黄昏の中を走っている
右にも左にも田園が広がっている
嘘か本物か
遠くには山脈の影も見える
まぶしかった太陽はどこか隠れた
ぼんやりした風景をバスとおぼしき影がゆく
信号のまつたくないエリアのようで
ただただ走るばかり
ここはどこだ?
ZZZ

バスが苦手だった子供の頃を思い出す
すぐに吐きそうになった
バスに酔わなくなることが大人になることだと思つて
今はもう酔うことはないが



大人になつたという意識もない
むしろ退化しているのかも
子供の頃はどこへ行くか知つていたような気がするが
今は全くわからない
ZZZ

ビスケットをかじる
水を飲む
イヤホンから音楽が消える
電池切れ
水ももうすぐなくなる
旅はまだまだ続くのに
イヤホンから音楽が消えたので
外を見ることしかできないが
(バスの中では本は読めない)
外はもう暗く 何も見えない
水ももう一口飲んで
眠ろう
ZZZ (つづく)